

林政ジャーナル

No.33

2002年11月25日

日本林政ジャーナリストの会

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-9-13

三会堂ビル 日本林業協会内

TEL 090-5541-6891

FAX 047-444-0135

禁無断転載

日本の森と英ウエールズの森

＝ アファンの森の管理と森林教育 ＝

C. W. ニコル

《ニコルさんの略歴》1940年、英国の南ウエールズで生まれる。17歳でカナダに渡り、北極地域の野生生物調査を行ない、以後、カナダ政府の漁業調査局、環境局技官として12回に及ぶ北極地域の調査を行なう。1962年、空手修業のため初来日。67年より2年間、エチオピア政府の野生動物保護省の緑主任管理官になり、国立公園を創設し公園長を務める。78年、カナダ政府技官の職を辞して来日し、81年から長野県黒姫に居を定め、作家活動に入り、エッセイや講演などで環境問題に積極的に発言を続ける。その間、黒姫一帯で少しずつ山の土地を買い、現在18%におよぶ。95年、日本国籍取得。購入した森林は長野県に寄付したが、財団組織で管理することになり、2002年5月に財団法人C.W.ニコル・アファンの森財団を設立し、理事長に就任。

40年前に初めて日本に来た。目的は空手だった。いま7段。その時は22歳だった。17歳から北極探検に続けて行った。最後の北極探検は19カ月。カナダの北極を旅していて、日本に来たらあまりにも危険が多くてこわかった。北極で熊が来るなら、遠くから見える。見えなければ犬がほえ

る。鉄砲にゆっくり弾をつめて出ればいい。でも東京はいきなりバスとかタクシーとか、どこから襲ってくるか分からない。あの時は22歳で、19月間、一度も女性を見ていなかった。もう大変だった。どこ見ていいか分からない、あまりにも美女が多い。それから街の中で慣れている人は街の中の歩き方がある。慣れないと、こけちやう。人にぶつかる。だから時々、止まって、それから動いた。彼女が前に来た時、動けない、臆病になりました。

私の親父はイギリス海軍に27年いた。だから、世界を回った。僕に手紙をくれた。「日本はとても良いところで、日本人は礼儀正しい民族だから、おまえも礼儀正しくしろ。でも要注意が一つある。あの酒は気をつけろ。飲みやすいかもしれないが、二日酔いがひどい」と。だから最初、日本に来て一生懸命やっていたが、精神的に疲れ、この街は僕にはダメと思って、空手の先生が先輩たちに言って「こいつを山に連れて行け」となった。冬だった。初めて日本の冬山を歩いた。深くショックを受けた。日本の人口はだいたい英国の2倍くらい。なのに、こんなに森が多いのかとびっくり。たぶん信州あたりだったろう。こんな

に落葉樹のすばらしい原生林があるのかと驚いた。その後、2年半、休みがあったら、山や島へ行った。

民宿の串刺しの魚 イノシシ鍋に感動

考えてみたら第二次大戦が終わって16年、なに元敵国の若造がどこに行っても、やさしくされた。私が小さい時、サケ・マスは貴族が食べるものだった。普通の人の手には入らない。産業革命のために英国の川はほとんど汚染されていた。保護された川はだいたい貴族や王様、大金持ちのスコットランドやウエールズの奥の山々のもの。だから、われわれにはサケとかマスは捕るなら密漁しかなかった。日本の民宿に泊まって、塩つけたイワナが20本もイロリにさしてあった。僕はその親父がそんなに金持ちというわけじゃないのに…、大した密漁者だと日記に書いた。それから山を歩くと、イノシシ鍋（ぼたん鍋）に出会って感動した。イノシシは、ケルトの一番のご馳走。だれが一番いいところを食べるかでケンカしたことが伝説に残っているほど。日本に来るまで僕はイノシシを食べたことがない。何百年も前に英国では絶滅した。熊もいると聞いて、ほんとに感動した。熊は英国から絶滅したのが約900年前。

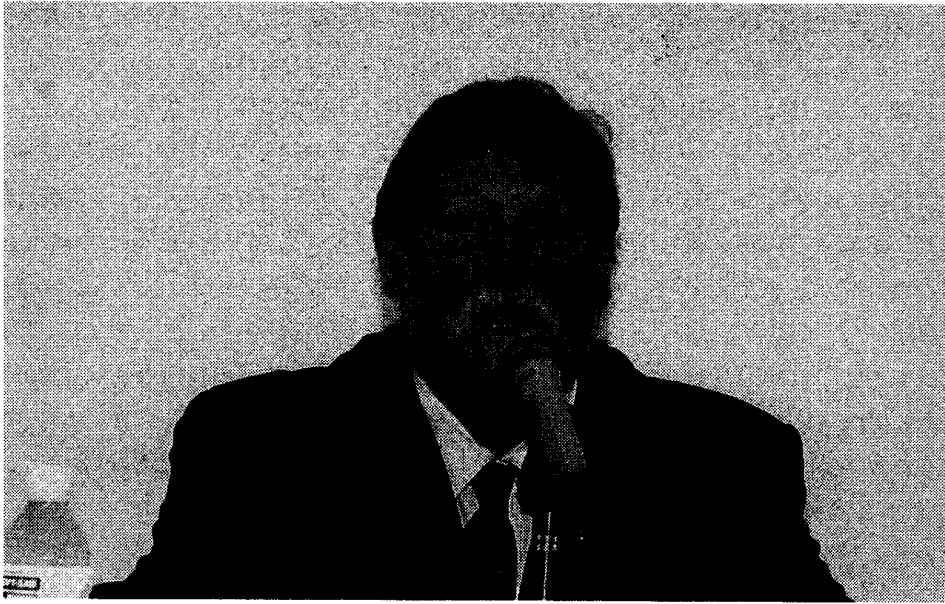
それから日本の山を歩いて、美しい田舎の景色、山も川もきれいで、水が透明。感動した。僕が育った南ウエールズは子どもの時は、森の面積は6%だった。ローマ帝国の時代、2000年前の記録があるが、98%だった。森が伐られたのは石炭の需要が急増した産業革命のころ。とくに第一次世界大戦のあとで、森はほとんど伐られた。炭坑の天井を支える杭木に木材が使われた。まっすぐな木が必要とされた。トウヒ、カラマツなど。だから、僕は原生林がどんなものか分からなかった。生まれた上地の近くに“妖精の国”があった。1畝もない。ナラ、オークなどの森だった。古い木

があったけど、すごいところだと思っていた。日本に来て、ブナ林を一日中歩いて、まだ林が続くほどの広さだった。感激した。日本は世界一恵まれている文明国だと、24歳の時に書いた。

その後、カナダに帰って、北極の仕事をし捕鯨船に乗ってイヌイットへの旅をした。いろいろやったが、森への思いがあった。1967年、エチオピアのハイレセラセ皇帝に雇われて、国立公園の公園長になった。初めての試みで地図をつくり、動物と森の状態を調べた。密猟者と戦ったり、小さな橋を造ったり、人間が歩く道を造ったり、小さな病院などを造りながら、つまり人間が住めるよう、入れるように開発した。しかし、あの国はだんだんとソマリアとかスーダンとの戦争、そして周囲の森をどんどん伐採して段々畑など造らないので雨の時に土砂が流出。8カ月雨が降らない。森が破壊されると、どうなるか。裸の山々があって、その前の年に大麦畑を作っていたが、天敵がいなくなりネズミが増えて昼間でも馬が怖がって歩けない。だから、馬から降りてタズナを引いて歩かねばならなかった。本当に、自然のバランスが崩れるとどうなるかを見た。そして、やっと国立公園になった。最後の数カ月で政府が「よし国立公園、君たちが治安を良くした」と。僕は203人の密猟者と山賊を逮捕した。だから、自然保護は“可愛いなあ”とか、“さわつちやいけないなあ”という感情じゃない。ほんとうに自然保護は人のためでないダメ、とわかっていった。でも政情が不安定になった。

「山美しく、日本は天国」 広葉樹伐採し、スギ植林に違和感

日本に帰ってきた。東京から出たら、あの砂漠の色でなくて、枯れている畑ではなくて、日本が青々としていた。どこでも水が流れている。どこでも水がおいしかった…。30歳の時である。40歳で長野県黒姫に入る。どうして黒姫かというと、



黒姫の山々が独立している。戸隠、妙高、斑尾、黒姫…がドーンと。山はみんなそれぞれの顔がある。暗い景色でなく、広い草原の景色。山に行くと、熊もいる、美しい森もある。僕は天国に来たと思った。しかし、山の奥ではその頃、木をばっさばっさ伐っていた。これはショックだった。そして、それらの年輪を数えたら、ブナとかナラで400年のものもあった。斜面にあった。それを伐りだして、スギとカラマツを植えていた。どう見ても、1980年、81年、82年にスギを植える時代じゃないだろうと思った。水源地の古い森を択伐（選んで伐る）するのは分かったけれども、ほんとうに皆伐していた。部分的に浸食も起こっていた。そこで、林野庁にケンカを売った。でも、これは一人の外人の意見ではなかったのである。僕は地元の猟友会のメンバーになった。なぜかという、山を知りたかったら猟師と一緒に行かないと分からないから。日本の山登りは、すごくたくましくていいけれど、だいたい急いでいる。一生懸命、てっぺんまで行って、ヤッホーヤッホーとやって、おにぎり食べて、缶ビール飲んで、写真とって、急いで帰る。

猟師はこの沢に降りてみるとか、あの川に行く

とか、ゆつくり。猟友会のメンバーと一緒に行く。いろんな所に。「昔、熊がそこにいたのですよ」とか、「ムササビがいつばいいたよ」とか、そんな話を聞く。「どうして言わないの」と僕が言うと、「日本人は日本人の言うことを聞かないから、お前言え」となって、長官に手紙出した。「ハチマキしめて“突撃”」との思いだった。ところが、ちょっと走って振り返ってみたら全く一人。だれもついていない。夜に勝手口から酒2升も持ってきた。「おれには親戚がいるから」と。よかったのは、どうして宮林署か林野庁で仕事するのか。山が好きで、山を勉強して、山で働きたい人がほとんどだと分かった。日本の男はウェールズの、ケルト人と似ているところがある。面と向かってケンカしたら、友達になるケースが多い。陰口を言うと嫌われる。あの当時から友達がたくさんできた。だから、どうして、日本はバブルの時代に、まだ古い森を伐っているか。分かりました。じゃ、これからどうして森を手入れしなくてはいけないか。水源地のための税金とか聞いている。ただ、日本は可愛らしいところがある。グチを言うと、テレビに出してくれる。そうすると、今度は講演の声がかかり、本が売れる。あち

こち呼ばれる。友達が多くできる。しかし、バブルの時代のはじめ。思いだして下さい。どれほどゴルフ場が増えたか。僕はあちこち呼ばれて見た。良い里山が全部伐られて、ゴルフ場になった。たとえば、妙高あたりでリゾート法ができる前までは、標高1500mより上の森は伐れなかった。リゾート法ができてから、上のいいブナ林をばっさ、ばっさ伐った。そんなことをあちこち呼ばれて「ニコル先生見て下さい」「書いて下さい」と訴えられた。川がコンクリートになって、干潟が埋め立てられて、僕は46歳ぐらいでちやほやされ「助けてくれ」と言うしかできなかった。日本は大好きだけど、うるさい“客”は嫌われる。

英ウエールズ、炭坑で木 が消え、最近、緑が復活

ちょうど、その時に南ウエールズから手紙が来た。アファン・アルゴーエド。アファンは「風が通るところ」、つまり谷間。ゴードは「森」。アファン・アルゴーエドに森の公園ができた。えっと思った。私が子どもの時に、どうして森の谷間に、木がないのかと、おじいさんにきいた。炭坑のお陰で木がない。炭坑には横掘りも縦掘りもあったから、ボタ山が広がっていた。その上に英国政府が第2次世界大戦のあと、エネルギーを石炭から石油に切り替えた。だから、南ウエールズは失業者が37%にのぼった。炭坑がつぶされた。「どうして、こちらを先につぶすの」との不満が充満。いやな政治、いやな雰囲気があった。だから、僕は北極などにあこがれていた。あそこに、森の公園ができたと聞いて、驚いた。南ウエールズから僕と同じように、いろんな人が他の国へ行った。その人たちの思い出のために、南ウエールズのその小さな公園の中に日本など外国の木を植えたいがどれがいいか、ときかれた。「黒姫の木は南ウエールズの気候に何が合うか」と。想像できなかったから、行ってみた。ほんとに、

谷間に緑が蘇っていた。南ウエールズの最後のパンチは、大雨のために、ボタ山がつぶれたこと。真下に小学校があり、子どもたち、先生方が全員死んだ。その後、ウエールズの人たちが立ち上がった。「自然が荒らされた」「この地滑りを止めないとダメだ」。滑り止めを造ったけど、長持ちさせるためにコンクリートでなくて、石でなければダメと分かっていた。コンクリは100年もつかもしいない。でも、石は何百年ももつ。だから、石を使った。きつい傾斜をブルドーザーで優しい斜面に変えた。その上に肥料をまいて、クローバーなど草の種を播いた。山の表面がかすかに緑になってから、みんなはバケツ一杯の土を持って、苗木を持って、山に行き、植えた。地元の人たち、政府、大学が参加した。「森を復活させないと、ダメだ」と目覚めたのだ。僕が行った時は、数十年たって、若い森になり、鹿が戻っていた。鳥も戻った。そして、川が少しづつきれいになった。環境が良くなったから、人も戻り始めた。それを見た。

長野・黒姫に十数年かけ 18坪の山林買う

そこで、僕はほんとうに日本が好きだ。22歳から日本にいて、世界を回っているけど、日本が一番好き。僕が日本で森がどうのこうのと言うよりも、やってみる。帰ってきて、17年前から、出演料やたまに本が売れた時に、カネがあったら少しづつ土地を買った。とても荒れた土地だった。みんなが「なんで、そんな上地を買うのか」と言った。地元の人たちもいろいろ噂し、オリンピックが来るから土地転がしをやるのだらうとか。藪と貧弱なスギやカラマツの森を、生物多様性ゆたかな森に変えたい。しかし、私の専門は水産。エチオピアで森を見た。それから、森が大好きだけど、英国の森やカナダの森は…。日本の方がはるかに木々や植物の種類が多い。だから、地元の人

と一緒にないとダメ。16年前に松木さんという人を口説いて雇った。森はいま、全部で18畝の広さになる。「アフンの森」と名づけた。

(スライドを見ながら) 買ったばかりの山林。16年前は貧弱な木しかないし、笹が多い。笹刈りをした。鳥の巣のある場所は残した。つるが多いのにもびっくり。荒れた森に、つるが暴れる。大事な植物だけど、木を絞め殺すので、つるを切った。口だけでなく、仕事もした。切り株から出た木が多かった。僕はチェーンソーが好きではないから、斧とナタでやる。26種の木も植えた。ブナ。笹があると抑えられて、(芽が) 出ない。一部では満州から引き上げた人々が森の土地をもらって畑をつくらうとした。森を伐採してブルドーザーを入れたら、水の排水が悪くなった。雪解けのあと、表面に浅い池がたくさんできた。夏になると乾いてしまう。いい木が育たない。だから、場所によっては池を掘った。その時、土器が出たりもした。ちゃんと届けたが、弥生時代のものであった。2mぐらいの赤い土の下は川のあとのようであり、土器はそこにあった。赤い土は上から流れてきたのだろう。植えたのはヤナギ、ガマ、アシ。数カ月あと、緑が回復してきた。2年あと、植物がはえ、トンボ、カエル、カワセミ、おしどり等が増えた。水はけが悪いところは夏に乾かない所もある。カタクリの花も。喜んだのは、笹を刈ると、林床にいっぱい光が入る。その結果、花がたくさん咲く。20種ぐらい、絨毯のように出た。スマレとか、いろんな花が…。鳥のキツキが4倍ぐらいに増えた。サンコウチョウ、テン、ハクビシン、クマ。クマは6頭来る。大きくて古い木がない。一番古いのも、60年生ぐらい。平均40年生ぐらい。だから、フクロウがすめるような大きい木の空洞がない。ネズミが増えた。フクロウとかのため巣箱を設置した。今年、3個の卵を産み育った。ヤマネは、炭焼き小屋の

カヤの屋根に生み落とされていた。

森が明るくなると、どんな木を間引いたらいいか、残すか、仕事がしやすくなる。シイタケとか、ヒラタケとか、ナメコをつくった。良く出て、おいしいけれど、8割以上が盗まれる。一方、ウェールズの小さな公園がいま、だんだんと地元の人たちなどの努力で1万竈になっている。ウェールズは小さい国だ。人口200万しかない。この中で、散歩道が100キロ、マウンテン・バイクの道は200キロ。ボタ山の山肌が緑になり、川もきれいになり、マスも放され、カワウソが戻ってきた。人々も少しずつ帰ってきた。私も一角に日本のオオヤマザクラとナラの木を植えた。

ウェールズの森と黒姫 の森が『姉妹森』に

私は小さな長野県の森を財団にし、県に寄付した。人によって「おかしい、なぜ自分の土地やおカネを寄付するか」と言う人もいる。しかし、私はこの国に40年前から来て、国籍もいただきました(95年に)。この国が好きで、いい生活ができて、いい友達がたくさんできた。だから、未来へのお返しをしたい。僕はエチオピアにいる時、一生懸命、土地を守ろうとした。しかし、血を流しても森は守れなかった。自分は国を捨てた。カナダに行って、北極へ行って、日本に来た。しかし、国に戻った人たちは必死に森づくりをやった。もしウェールズへ行ったら、私の子どもの時より今がいい。森がある。サケが川に上がるようになった。だから、僕は日本のために何ができるか考えた。

先週、“姉妹森”をつくった。黒姫のアフンの森と、ウェールズのアフンの森と。ウェールズでは森でいろんなことをやっている。たとえば、いろんな道がある。その道を人の健康のために使う。たとえば、軽い心臓病の人に医者が公園のAコースを週3回歩きなさいという。糖尿病の方、ちょっと腰を痛めた人など、それぞれの散歩

のコースがある。いろんなことを考えて、森は人々のためになる。それから水、たいしたもの。ウェールズはいま、フランスに水を売っている。考えられないことだったが、水が良くなった。経済も南ウェールズは、僕が子どもの時に比べて全然ちがう。でも、シイタケがとっても高い。これは中国から輸入している。彼らも山を歩いているから、シイタケの作り方とか、ナメコ、ヒラタケの作り方など習ったら喜ぶでしょう。お互いの交流ができると分かったから、私が昨年、ウェールズへ行った。そして写真、ビデオを持って、その人たちと話した。われわれの森は小さいけど、似ている。そうしたら、向こうの公園長が「小さいけど、こんなに多様性ゆたかな森は英国にはないよ。すばらしい。姉妹森になろう」と言った。彼らは日本に来てくれた。一緒に森を歩いて、うるさい松木さんとほんとに友達になった。松木さんも東京に連れて来るのが大変だったのに「おれもウェールズに行かなきゃだめかな」とまで言うようになった。

それで、姉妹森をつくった。これから若い人が森のことで対話ができるなど思っている。私はウェールズ系日本人です。われわれの国歌は、英国の国歌と違う。日本で聞いたことがなかった。でも、あの黒姫の森の中で、ハーブとフルーツで、ウェールズの国歌をやった。ほんとに、うれしかった。私は国から出た。そして、いま日本人になった。僕はこれから日本にずっといるけど、「橋」をつくったな。この国歌を聞いたな、とうれしかった。16年前にウェールズに行った時に、日本のテレビ・スタッフと一緒に小さな町に入った。地元の人たちと歌の自慢をし合った。クワイア。男のコーラス団が町にあった。120人。突然に、「君が代」を歌ってくれた。これはいい国だな、日本もいい国。こういうことがあって、いい対話ができる。これから、僕はずっと頑張るけど、マスコミの人間で、音楽大好きだけど、吹け

るのはホラしかない。マスコミにいと、誤解されやすい。でも、私は日本の森、日本の自然、それから日本の未来を命かけて見ようと思う。

この話には、もう一つのきっかけがあった。今年の日英同盟の100年記念。父が海軍だった。僕は森づくりをするために日本国籍がないとまずいと思い、国籍をとった。だから、あの世に行った父に何か送りたい。日英同盟の海軍の記録をずっと調べた。100年記念で何かできないかと、いまの大使と話合ったら、「グリーン同盟がいいのでは」となった。そして、日本中で公園など170カ所ぐらいに、「オーク」の木が植えられている。オークはカシというけど、ナラの方が近い。ケルト人にとっては「神の木」。ケルト語ではデュールという。デュアラブル（長持ちする）、エンデュア（我慢する）など英語に入っている。だから、長い間、何があっても残る、大事にする、その木を植えた。これらが大きくなる時には僕らはこの世にいない。しかし、さきほど、林野庁長官と話したけど、落葉樹、ナラとかブナ、サクラなどは大事だ。でも、政治家などにすぐわかる経済的な価値が100年も、200年もかかるから、未来を信じて落葉樹を植えなければならないと思う。木材がそのうちに、テーブルやボートになるかもしれない。何かなるけど、われわれの世代で、価値が分かりにくくても、未来を信じてやろう。少なくとも、水源地をよくする、教育のためになる、そして生物の多様性をゆたかにする。多様性は可能性に通じる。日本の未来の資源は、ほんとうに生物の多様性と水と森だと思っている。

〈質疑応答〉

(加藤林野庁長官) さきほど部屋に寄っていただき話をしたが、一番印象に残ったのはアフンの森について、いろんな記録をとっているとの話だった。変遷が分かるようにしていただくのは大変いいと思う。森をどうして行くかについて、そ

ういう記録をとりながら、本論を進めて行かれる。われわれ、日本の森について、そういうきちんとしたデータを持っていない場合が多い。これから、やって行くことが必要ではないか。

(ニコルさん) 最近、犯罪が増え、英国も同じで、悩みのタネ。だから、森の中で仕事させている。結構、うまく行っているようだ。外で、いい空気を吸い、青空の下で、正直な仕事をする。いろんなことをしながら、国のために働けという。成功している。

(加藤長官) いま、子どもたちが森に入って、いろんなことを勉強するという動きが始まっている。やはり、森の中で実際にいろんなことをやってみることが必要だ。いままで、日本は昭和30年代ぐらいまでは森に入るのは日常的だった。40年代以降はそんな機会がきわめて少なくなった。小中学校の時から森に入り、森のことを経験するか、ニコルさんのように、子どもの時の経験が生かされている。そんな経験をしておくことが必要だ。いま、学校がそういうことをやろうとして問題になるのが、先生。20代~30代が実は子どものころ、そんな遊びをしていなくて、森へ子どもを連れて行っても何をしていたか分からない。専門学校のことを。

(ニコルさん) これだけ優れた自然がある国に、いい国立公園がいっぱいある国に、こんなにレンジャー（森林監視人）が少ないのはおかしい。13年前に調べたら、レンジャーの数は120人だった。カナダは当時4500人、アメリカは9000人、ケニアは3000人。圧倒的に国立公園の中での指導者、教える人、守る人が少ない。だから、国立公園で密猟がすごい。「レンジャーを増やしてくれ」と環境庁に陳情した。そして訓練をさせて、国立公園にたくましい人たちがいれば、公園を守るだけでなく、人間を守る、人間を教えたりするじゃないか、と。機動隊はどうしてこんなに多いか。レンジャーを増やして、いざという時

に山から呼べば…と言った。そのために、学校が必要だと言った。どうしてか。僕がエチオピアにいる時に、私のアシスタントはタンザニアの専門学校を卒業していた。彼は勇敢で優秀だった。一緒に勉強したから、アフリカ中に仲間がいた。アフリカの未来は野生生物にあるという共通の目的があった。こういう学校を日本に造って、日本の若者だけでなく、アジアからも受け入れ、森や国立公園の育ち、野生生物、そういう自然教育のリーダーになったらいいという理想を待った。そんな案を出したら学校ができた。8年教えている。年間100人ぐらい。訓練は長野県のわれわれの森とか、周りの国立公園とか、それから屋久島。卒業生がアフリカに行っているし、アメリカ、フィリピン、インドネシア、環境庁、エコツーリズム、環境アセスなどに入っている。でも、教えるのは大変だった。フィールド・ワークを教えなければならなかった。なぜテントにするのか、なぜロープが必要か、なぜナタを持たせるか、なぜ最初の手当かとか。なぜ、なぜ、なぜ…、フィールド・ワークをやると、必ず文句をつけられる。ナタを使えないで林業ができるか。苦労している。

— 子どもたちを森へ入れるのに、何かアドバイスを

(ニコルさん) 40年前に日本に来た時に、東村山に住んだ。そのころは休みがあれば、里山で子どもは必ず遊んでいた。住みかつかったり、たき火をたいたり。大人が子どもを連れて森で遊ばせるよりも、子どもが遊べる森があった方がいい。大人より、やさしい兄ちゃん姉ちゃんがいた方が遊びやすいのではないか。それから少しずつ、ものを使うとか、自由に遊ぶ楽しみを感じてから、教えた方がいいのではないか。それから「川で遊ぶな」というが、遊べない状態にしてしまった。僕の家の前は、アプローチを安全にしたので、子どもが遊ぶようになった。だから、その環境づくりをしなければならない。ジャングルみたいな

暗い森は、小さい子にはこわい。だから、明るいところもあって、遊べる木もあると、自然に戻って行くと思う。里山が復活しないと…。

— 昨年、視察した北米の西海岸の話を

(ニコルさん) カナダの西海岸の方で、この数十年の間にすごい伐採をしている。円が強かったから、カナダの材は安い値段で、結構、日本に来た。しかし、カナダの伐採も、日本の林野庁がやったのと比べて、林野庁はかわいいものだなと思える所がある。西海岸で、ひどい伐採をやった。結果として、何百万匹というサケやイワナが上がっていた支流が土砂で埋まったり、砂利が流されたりして、サケが産卵できなくなった。そこで、百年先の国を考えて、一生懸命、川づくりを始めた。川づくりというのはコンクリートを張らないで、サケが安心して上がって産卵できる川、自然の川を造り始めた。ところが、条件を考えて、たとえば、砂利場をつくる、休むところなど造っても、稚魚を放すと、思うほどサケが戻って来なかった。どうしてか。調べたら、サケが元気な川にいる水生昆虫の体は60~70%が海からのものでできている。鱗とか、窒素とか、いろんなものが海から来ている。だから、小さなサケの稚魚が砂利から出て、川の中で生活して、十分元気になったら、海へ行く。何年もかかって、自分の川へ戻って来る。自分の生まれたところで産卵する。そのあとは、体がぼろぼろになって死ぬ。でも自然は無駄がない。この親の体が微生物に分解されて、子どもの育つのを手伝った。山にない栄養が海にある。だから、最初から、直した川に養殖場からホッチャレ(サケの死体)を置いた。しかし、危険。熊が来る。山猫が来る。臭いし、コストがかかり、その上に、もし病気を山に置いたら直せない。だから、また、サケの川を分析して、どんなミネラル、どんな栄養が大事か。それをペレットにして、直した川にヘリコプターからばらまいたりした。すると、サケがやはり倍にな

り、3倍になり、10倍になって戻って来る。イワナも戻って来る。それから、サイクルがまた始まり人間が捕りすぎないようにすれば長く続く。でも、もう一つの影響が分かった。熊は川でサケを捕る。捕ったら森へ行く。(捕った場所を他のものに分からぬようにするため?)。たとえば、30キロぐらいのキングサーモンだったら、300mぐらい先の森の奥に入って頭を食べ、腹を裂いてイクラを食べ、それからもぞもぞしてくる。急いで、捕った場所に戻る。そして1年、だいたい1頭が700匹のサケを森の中に落とす。それは半分以上、森の“エサ”になる。虫が食べる、鳥が食べる。サケの栄養が扇形で川か森に行く。これは木に影響があるかどうか。カナダのライフ先生が調べた。木をボウリングして、厚い鉛筆のようなものを採る。年輪が数えられる。そして、いつ、どのくらい川からサケを捕ったというデータと突き合わせる。川が荒れてだめな年もある。年輪の中で、海から出た栄養が入っている。調べにくいけど、一つ調べやすいものがあった。窒素の重い元素の重化合物。サケの皮にたくさん含まれている。それを森に落として、木の中に入って何百年も残る。「これはサケの影響があったな」と、いい記録がとれる。その中で、サケが入っている木の年輪が、入っていない木の年輪と比べて2倍半の違いがある。うんと太い。うんと速く成長している。その上に病気が少ない。ビタミンやミネラルが必要なのは人間だけではない。木も必要、昆虫も必要。われわれに、いままで、健康的な森があって、健康的な川があって、それで沿岸の漁業も健康だ、とそれを知らない人が多い。だから漁師が一生懸命、森に木を植えている。サケもアユもハゼも、森を返してあげないとダメ。僕は日本の川の何本かに、サケやアユがちゃんと戻れるようになって、そして人間の分け前をちゃんと決めて、森の健康になる、そういう理想的なところが数カ所あってもいいではないかと思う。私は2

年で川と支流、222キロを見た。そして、サケなど魚が10倍以上になって、川に戻って来るのを見た。どれほど違いがあるか、それに感動した。やはり、すべての中にサイクルがある。われわれも、そのサイクルの中にいるということを忘れてはなるまい。

— ササはどうして制御しているか

(ニコルさん) われわれの森は小さい。ササを3年続けて刈ったら、他の植物が勝ち始めた。植えた苗木が、ササの上に頭を出すようになったら、そんなに刈らなくてもすむようになった。ウエールズはそんなにササはないけど、ワラビがとっても丈夫。太くて強い。だから、場所によってはササと同じように戦う。ボタには最初はワラビもはえない。

— ウエールズと黒姫の(姉妹森)の今後は

(ニコルさん) 一番、われわれが興味を持っているのは、どうしたら森の中の道を人間の健康に使えるか、である。どのくらい人間が森を歩いても、森に悪い影響がないか。ウエールズは森の道をいっぱい造っている。森の道と健康の関係をみたい。コウモリにも興味がある、それと、カワウソが日本でも戻ったらいいな。英国では昔、川岸に柳を植えた。大きくなる柳を高切りにしていった。だんだん、ずんぐりした古い木だけで、根っ

こが丈夫で、中は空洞。これはカワウソが棲む場所だった。ああいうものも見たいな。でも、一番さきにやるのは、どうやって生物の多様性とエコリズムを盛んにするか、である。

— 長野にカラマツの山を老母が持つが、所有者にとっては現在、山の価値が極めて低く、どうするか悩んでいる。

(ニコルさん) 僕の場合は約20人から森を買った。死んだら、残るまい。税金や親戚があので土地を処理すると…。残すのが夢。だから、僕にとっては財団ができたのは、すごくよかった。しかし、すべてに当てはまるか分からない。英国ではナショナル・トラストがあり、105年ぐらい前にできて、最初は3人で始め、今はトラストの土地は国の環境庁が持っている土地より広い。だから、もし、われわれがやろうとしていることが日本で大事と思ったら、われわれと同じように環境庁、林野庁、自分の市町村などと組んで、自然を守るよう、残すだけでなく育てる。たとえば、川を手入れしないと、いい木にならない。その仕事をしたい人、できなければカネを出す人とかをさがす。言うだけではダメなのだから。いい人たちと組んだらいい。

(2002年9月4日、文責・高田浩一)

宮崎県へ共同取材

11月13日から15日まで宮崎県下の森林、木材産業を取材した。参加者は8名だったが、松形祐堯知事と会見して、中国へ日本の杉丸太を年間100万立方メートル輸出する協定を結んだことを取材したのをはじめ、400年前から直挿造林したオビスギの遺伝子保存林、板から住宅まで一貫経営で不況知らずの木材企業。スギの有効利用と需要開発の研究をしている木材利用技術セン

ター、幅170mmの集成材を用いた日向ドーム、近代設備の集成材・プレカット工場などを取材するとともに、地域の林業及び木材産業のリーダーたちとの懇談など、宮崎県林務部のご配慮で濃密な取材活動が出来た。

林業経営、木材産業ともに極めて厳しい環境の中で懸命に活動している人たちの切実な声に心打たれた。

詳細は次号で報告します。

(吉藤 敬)

＝ 森林経営と環境 ＝

森林業 田中 惣次

檜原村が変われば日本が変わる

森林問題は、地球的な規模で注目されていますが、国内の森林は、平和の中で安穏としてたところがあります。森林に対する意識は、それぞれの立場で異なりますが、地球環境を森林が救うような考え方が多いように見受けられます。しかし日本の緑・森林がどうなっているのか、大方は、根っこの部分まで掘り下げて本質を見ていないのが現実だと思います。1200万都民の中で、何人の人が森林について真剣に考えているだろうかといつも思っています。私自身、森林ボランティアという言葉を使い初めて30年ほどになりますが、その間に都民の中で実際に山に入って、森林作業に参加した人はそんなに多くないと思います、現在でも年間0.01%の1200人ぐらいでしょうか。これが2%になれば相当な力になると思いますが、実際に山で汗を流す段階までいっていません。なにはともあれ、一人でも多くの方々に森林とかわっていただきたいとの願いを込めて、ボランティアの方々とおつきあいさせていただいています。

今日は、OHPで写真を見ていただきながら、森林経営を含めてこんな思いをしながら山づくりを進めているという実情を、お話しさせていただきたいと思います。

私は檜原村で森林経営にたずさわっています。神奈川県と山梨県の境界に接してまして、都心から60kmほどのところに位置しています。今日は、霞ヶ関まで車で1時間15分ほどできました。東京

都で一番へんぴな地域です。しかし、全国林研グループの役員をしている関係で、全国各地の林地へ行きますが、東京に村があって林業やっていると、皆さん驚かれます。この大変な時期に東京の山でどんなことをしているんだろうということ、視察者も多勢来ます。私自身「檜原村は日本の中心の村だ、檜原村が変われば日本が変わる」ぐらいの気概をもって森林経営を続けています。

植生が豊かな檜原村

秩父古生層の山腹にはスギ、ヒノキが適しています。丘陵地帯はコナラとか、照葉樹のツバキ、クス、シイなどが生育しています。雲取山は標高2千mありますので、亜寒帯から亜熱帯の小笠原まで、動植物が広く分布しているのが東京都です。

丘陵地帯には、土壌条件でスギ、ヒノキの生育が悪いので、植林は適しておりません。丘陵地帯でもスギ、ヒノキの工林が可能ではないかと思われる方もいますが、適地適木ということで丘陵地帯にはコナラ、クヌギなどを、関東ローム層にはケヤキやシデ類が多く分布しています。

林業はお山の大将で成り立たない

昭和初期ごろまでは、四ツ谷が木材の集積地だったということです。五日市や青梅の人たちは、渋谷が村だったころ、こちらは町だったと言っています。自然はいいなと言いながら、23区内では開発が急速に進んで自然が失われました。都下といわれる23区外にも365万人が住んでおり、

開発が進んで人工が集中しつつあります。

江戸時代には、「街に煙が上がれば村はもうかる」と山唄にうたわれていますが、山村と都市は昔から直につながっています。多摩川を下って行けば六郷までたどりつくように、古くから密着していました。それが、交通の発達によって、特に昭和30年代以降は都市化が進み、緑地が急速に減少しています。

林業は、そういった状況の中で、国内のことだけを考えていられなくなりました。グローバリゼーションということで、外材を抜きにして林業を考えられなくなり、昔のようにお山の大将で、木材生産という林業だけではたちゆかなくなっているのが現実です。

環境を考えるならスギ、ヒノキ

私の山にはまだ広葉樹がたくさんあります。人工林は東京都全体（多摩地域）で約60%、私のところは64%（230%）が人工林です。奥多摩のほうは、全部人工林ではないかと皆さん思われがちですが、家の近くなど利便性のいいところから植林してしまっていて、山奥は広葉樹の天然林が多くなっています。

集中豪雨などで山崩れが発生すると、テレビなどで取材しやすい場所にある人工林が写しだされ、人工林が悪いように思われがちですが、実際に奥山に入りますと、広葉樹が根こそぎ崩れていることがあります。自然災害は、人間の力ではとても及ばない強力なものです。

私のところでは、拡大造林を行っています。サクラ等をりん片状に残してある場所もあります。環境を考えるのであれば、スギ、ヒノキを植えるべきだと話しています。単位面積当たりの成長量は、広葉樹に比べヒノキで2.5倍、スギで3倍あります。国土面積がそれだけ広がるということですから。

今年の林業白書では、日本は世界の木材輸出力

の20%を輸入していると書かれていますが、ほかの資料を見ますと1番多いところで37%が、ありとあらゆる産地から日本に入って来ていると書かれていましたが、3割ぐらいは入って来ているように思われます。

一方で、世界の森林面積は毎年1300万㊦も減少しているということです。それをサッカー場にあてはめると1分間に70面ぐらい消えているということになります。そういう話を、皆さんにお話しますと驚きます。

スギ、ヒノキの適地にはスギやヒノキを植林し、瀬戸内のようなところにはドングリのなる木を植えて、立派な森林に誘導して行けばよいのではないのでしょうか。

日本人が使う木は、国内でまかなえるような体制に立つことが大事です。そのような観点から、適地適品種を基本に山の利用を考えながら植林しています。スギの品種は2500種類ぐらいありますから、40年、50年たってから失敗したのではたまりませんので、土地にあった品種を選びます。たとえば九州の苗をもってきても、ここではだめなことがしばしばあります。そのため、同じ品種を同じところに集中的に植えるようなことはしていません。危険を分散する意味で、5種類なり6種類を混ぜて植え、その中に地元の苗木を混ぜて植えるようにしています。

磨き丸太の天絞の木も植えています。ヒノキと混植して25年ぐらいたったらスギを伐採して、後はヒノキの林にする計画です。磨き丸太は、住宅建築様式が変わって日本間が少なくなり、磨き丸太が安くなっています。それでも北山では、原木で1本1万円していますから、25年生で1㊦3千円ぐらいになりますので、まだまだ恵まれています。北山では、安くてもどうしようもないと言っていますが、上を見れば切りがないし、下をみれば別の世界があります。そういうことを学びながら山づくりに励んでいます。

間伐をして、林内に光があたっている関係で、下層植生が繁茂しています。水と温度と光りは、植物が生育する三大要素です。水がなくなれば砂漠に、温度がなければツンドラみたいに、光がなくなると草も生えなくなります。森林の環境を整えることは、人間のためにとっても大事なことです。私の山では「立て木」といって、大きな木を残しておきます。複層林とか二段林と言われていますが、二段林よりは残した木を少なくしています。林内に光が入るほど下層の木の生育がよく、かん木類も育ちます。

林道は魔法の杖

林道は魔法の杖ということで、いつでも仲間と話をしています。私は作業道を入れていますが、開設には岩場があってコストがかかります。東京都の場合、岩場のようなところに林道を開設すると、1畝あたり20万円ほどかかります。1億円かけても500畝しか進みませんから、本当に徹々たるもので林道密度は非常に低いです。幅の広い林道でなくてもいいから、低コストでできる作業道を作してほしいと、東京都に陳情していますがなかなか動きません。最近になって、都の財政が厳しくなったので、林道の20分の1とか40分の1のコストで作業道をつくる気運になってきたところです。

奥多摩の森林は急峻だから低コストの作業道は無理ですと一蹴されてきたものですから、私は財政的に厳しい中で一生懸命作業道を開設しています。丸太を組んだり、ベルトコンベアの廃棄物を利用して横断排水溝を作ったりしていますが、これはいいです。林地が崩壊しないように配慮して、低コストで作業道を開設しています。

山腹には丸太を入れて、台風などで土砂崩壊を防止するようにしています。ゴムの横断排水は、水の流れがうまく散っています。排水の部分は崩れやすいので、杭や丸太あるいはベルトコンベアを使い工夫しています。

北山では、モノレールや幅1.8畝ぐらいの作業道を開設して、高付加価値の磨き丸太を搬出しています。徳島県の木頭村では、人員輸送用のモノレールを架設しています。

林業に従事している者は、途中でリタイアすることはないんです。なぜ辞めるかというのと、若い作業員と一緒に山に上がって行けなくなったときです。

人員輸送につかう乗用モノレールは、7、8人乗れますが、1畝1万円のできるそうです。しかし木材搬出には、非効率であり役に立たないということです。メーカーは2本レール、3本レールとか大型のモノレールを開発しているそうですが、効率の点では林道にかなわないようです。

国道、県道、公共林道のほかに毛細管的な道があって、それらとモノレールを有機的に組み合わせることによって、はじめて森林整備が促進されると思います。

林業は環境に負荷をかける産業であることを、キモに銘じて管理・経営しなければならないと思っています。三重県の速水さんは、植物オイルのチェーンソーを使用しています。愛知県では、公共の山には植物オイルのチェーンソーを使い始めたそうです。鉱物オイルに比べて植物オイルは高くつきますが、環境に負荷をかけないということであれば、そういうことを考える必要があると思います。

野生動物の被害が増える

森林を管理するうえで、野生動物の被害に困っています。奥多摩町はシカが増えすぎて、植林できない状態です。シカが林内で運動会をしているみたいです。網を張ってもその中で何頭も遊んでいる状況です。保安林は伐採後2、3年以内に植林しなければならない規定になっていますがそれもできない状況です。檜原村でも奥多摩町と接しているため、シカの被害が増加しています。

植林して初期の段階では、ネズミやノウサギの被害があります。ネズミは木の根元の部分をかじりますが、大発生すると木登りして、高いところの皮をぐるりとむいてしまいます。ノウサギは、苗の頭をスパッと鎌で切ったように食べてしまいます。

雪害もあります。昨年1月27日の雪では、サンブスギが倒れました。雪に弱いことはわかっていたのですが、心円で通直性があるので植えました。昭和61年の雪害のときは、真夜中に汗びっしょりになって雪下ろしをしましたが、今回は家のちかくでしたけれども、スギが折れる音を聞きながら「またやられた」といった感じでした。サンブスギは全滅でした。種類によっては、そういうことが起きてしまうんです。

放置では有用広葉樹が生えない

伐採跡地に植林しない山が増えていきます。奥多摩町でシカの被害で植林できないといましたが、東京都だけで植林されずに放置されている森林が230万ほくらいあります。放置して置いても、後から広葉樹が出てくるからいいではないかと言う方もいますが、アカメガシヤやヌルデなどの陽樹は最初に生えてきますが、コナラやシデなどの有用広葉樹が侵入するには20年、30年かかるのではないのでしょうか。

伐採跡地にスギやヒノキを植林しないとしても放置するのではなく、たとえば1万本あたり大きめのコナラなどを5百本くらい植えて、その周りだけ刈っておけば、あとは放置したままでも補充できない部分で種子を落としたりして増やしていけば、日陰ができて他の広葉樹も生えてきますから、そういう手立てが必要だと思っています。放棄したままでは、人間が使える有用広葉樹林にはならないということです。

7、8年前に、東京農大の紙野先生がチーフで、村の中心地にある山林24万を歩いて、日本の

山がどれだけ荒れているか調査しました。「維持されている森林」「改良されている森林」、「放置されている森林」「放棄されている森林」に4区分して調査しました。その結果、将来見込がないというか、やる気のない所有者が6割、維持と改良が4割でした。道路沿いで熱心な林家がいる中でこんな形ですから、奥山ではさもありなんといい形で荒れていると思います。これを全国に当てはめると、日本の森林は大変なことになっていることがわかるのではないかと思います。

林業のテーマパーク 遊学の森

一人でも多くの人に山の手入れに参加していただく、なにか手立てがないものかと考えて「遊学の森」を始めました。今年、山形県金山町で行われた全国植樹祭の会場が「遊学の森」と名付けられていました。私が遊学の森と名付けて10年ぐらいになりますけれど、金山の遊学の森で植樹できて大変感銘を受けました。遊学の森が全国に展開されることを願っています。

遊学の森は、林業のテーマパークだという感じで、針葉樹と広葉樹をうまく配置して、その中に遊歩道を作って、一周すると林業のことが大体わかるように、説明板を23カ所配置しています。林業に興味のない人にも興味をもっていただけるよう、アジサイを6000本植えました。10万本植えることを目標にしましたが、話半分で5万本植えられるればいいなと思います。鉢植えのアジサイを道端で売れるのも、森林業かなと考えています。

森で遊び学ぶということで、最初は農工大学の「森を見つめる会」のリーダーが4年生のときに、1年間休学して一緒に仕事をして、帰るときに散策する道と一緒に作ろうということで、学生を連れてきて一緒に作りました。中ほどの道はYMP（遊学の道プロジェクト）です。東京農大の学生が中心になって、月に1回1泊2日に来ていま

す。年2回イベントを行うのですが、インターネットで4年ほど前に募集したところ、愛知県や四国のほうからも参加する者があり、改めて情報機器のすごさを実感しました。

多様性のある森林をつくる

150年生の立木の下小さい木は、昭和27年に植えた50年生のスギですが、上下植生とも豊かです。250年生ぐらいのケヤキ、200年生ぐらいのカツラもあります。ほかにクリ、ミズキ、カエデ類などを積極的に残しています。最近、森林の多様性と言われていますが、立木や天然の広葉樹などを林業にリンクさせられるように考えています。

複層林は、スギ対スギとかスギ対ヒノキの二段林が一般的ですが、手入れができていない状態でしたら非常にすばらしいですけれども、人手がなくなると無残な姿になります。ですから、上木がある程度の樹齢に達したら下から生えてくる広葉樹をうまく仕立ててゆくほうが、自然にマッチした山になると思います。

針葉樹の樹齢が30年生以前に広葉樹を残すと、広葉樹が勝ってしまいます。30年生ぐらいから残すようにすると、遠景では針葉樹の山でも中は広葉樹が中間層を占めているような林相になります。針葉樹の幹は見えるけれど、あとは広葉樹の葉しか見えない。下層にはかん木類があり草が生え、コケむした石の間をチョロチョロと水が流れるのが、理想の森林の姿です。そのためには、200年、300年かけなければならないと思います。勿論、上木、下木とも光のコントロールをすべく、間伐などの抜き伐りが必要となるわけです。

私は各地の森林を見せていただいています。東大の清澄演習林も、遠くから見ると針葉樹林だけだと思ったが、中に入ると幹しか見えない。京大の芦生演習林はモザイクというか、遠くから見ると広葉樹と針葉樹がよく見えます。林業的な感覚からすれば、そのような山より遠景は針葉樹林

で、中に広葉樹があったほうが、適しているのかなと思います。

なぜかと言いますと、日本の森林は人工林が1千万㊦といいながら、全森林面積の4割です。ほうっておくと下から広葉樹が出てくるところで、針葉樹の人工林化されているわけです。光環境を整えることによって、広葉樹を残すことができます。人工林がなければ、成長量、蓄積量からいっても、広葉樹をもっと伐採することになります。ですから、スギ、ヒノキの適した場所には、そういった人工林を造るのは当然ではないかと考えています。経済的な価値判断だけでなく、地球的な規模で自然との共生を考えた場合、日本が世界の木材の3割も輸入して、他の国の森林を荒らしているようなことではいけないと思います。

広葉樹は放置すると倒れやすい

広葉樹林は、昭和30年代の燃料革命以後、全然人手が入っていませんから、下草やかん木類も少ない。30年ぐらい経ちますと萌芽しっぱなしで芽かきもしない、フジ蔓も切らないで放置されていますから、台風などの災害に弱い林層になります。

何年か前に、山梨県勝沼でブドウ棚がつぶれたことがありました。そのときに広葉樹も倒れていました。原因はブドウも広葉樹も同じでした。倒れなかったブドウ棚は、剪定してありました。剪定しないでヒゲの枝のあった棚がつぶれていました。広葉樹もフジやツタがからまった幹の上に雪が積もって倒れたのです。太いコナラが何本も倒れましたが、昔は、薪炭材として15年から20年で伐採していました。最近は経営的に成り立たなくなり、手入れをしないものですから、特に岩場などで大きくなって倒れやすくなっています。

人工林の場合は、素人でも30年生ぐらいまでの間伐などは伐採できますが、広葉樹の伐採は危険です。偏芯木で自分の方に倒れることがありますから、素人には危険です。

小さいヒノキがあります。見学者に、「上がってくるところに6年生で同じぐらいヒノキがあります。それを見てから、このヒノキは何年生かと聞きます」と、10年とか5年とか言います。40年経っているというとびっくりします。では「何が足りないのか」「どうすればいいか」とたずねますと、いろいろ考えて「光り」などと答えます。「光を遮っている木を切って光を入れればいい。

その最たるものが人工林で、多くの光をあてて成長を促し、短期的に使える木材を生産する」それが林業なんです。また、秋田杉は佐竹藩が、木曾桧は尾張藩が、“枝一本腕一本、木一本首一つ”とあって守ってきたものです。人手をかけないと、人間の役に立つ森林にならない、ということなどを説明しています。

森林のために木を伐る

尾根の南斜面と北斜面では植生が異なります。南斜面の乾燥したところには、コナラが多く、上のほうで土の浅いところにはアセビなどが育ちます。北斜面にはシデ類とかホオノキなど。両方に育つ木もあります。

例えばブナは水を育むと言われますが、実はブナは北斜面の水分の多いところを好みます。ですからブナは水を育むのではなく、水の少ないところでは育たず、逆に水を吸い上げる木です。

ワラビは南斜面の乾燥したところでないと生えないから、北斜面へワラビ採りにいっても採れない。カタクリは北斜面のような日陰でないと育ちません。

伐採した後、育成天然林施業にして3年経った森林には、蝶が飛び交っています。マユミ、ガマズミ、ムラサキシキブ、ウメモドキなど実のなる木やかん木を残しておく、小鳥が集まりますし、フクロウなどの猛きん類もきます。

伐採しないで放置しておく、逆に実のなる木が絶滅します。戦後は人間のために木を伐りまし

たが、近年は森のために木を伐らなくてはならなくなりました。

木を伐り過ぎた危機から木を伐らない危機に変わっています。天然林にしろ人工林にしろ、あるいは針葉樹の森にしろ広葉樹の森にしろ、そういう状況になっています。

東京都の水源林は、昨年で100年経ちました。奥多摩湖の堆砂率は2.1%とされています。佐久間ダムは31%、相模湖は年間20億円かけてしゅんせつしているほどです。

東京都の水源林は、尾崎行雄市長が奥多摩町と山梨県の小菅村とか丹波山村などの森林2万畝を買い上げて以来、潤沢に資金を投じて守ってきています。

水の問題は、飲料水だけで2025年には、世界で50億人が不足すると言われています。日本では水を輸入する必要はないと思います。

遊学の森でわき水が出ています。1年中枯れない水ということで、山手線の雑誌の中づり広告で紹介されました。それには「気絶するほどおいしい水」と書かれました。それから3カ月ほど、ポリタンクやペットボトルを持参して知らない人が入ってきました。ここでもキャッチコピーのすごさを実感しました。

ボランティアが活躍

山には雷の通り道があり、モミの大木が何本も落雷で倒れることがあります。そうすると、林内に光が入ってタカノツメやカエデ類が出てきます。倒木更新も見られます。

ボランティアの人たちと、二段林を造成しています。残す木は私が選んで赤いテープをつけておき、中間層に広葉樹を残す作業を一緒に行っています。

林研グループで、山菜などの栽培と木材生産の両方で収入に結び付ける試みも行われています。ここではミョウガとウドを栽培しています。ウド

は土をかけるのが大変なので、波板をきって輪を作り、その中に土を入れると省力化されます。ウドは山の中だと年々細くなってしまいます。太らせるには、水と光が必要ですが、山では根を太らせることができないので、栽培に向かないことがわかりました。

ミョウガは、良質のものが採れて、森の香「山びこ会」などと名付けて、直売所などに出荷しています。ミョウガは林床を利用した栽培が可能だと思います。シタケも自家栽培的に行っています。

JICAの研修生、日大林学科の実習のほか、ガールスカウト、ボーイスカウト、中学生、林研グループの人たちも利用しています。

西多摩地区の森林ボランティアは、日本でも先がけだと思います。10数組のボランティアが活動しています。リーダーの人たちが青梅、奥多摩、日の出などで、森林を復活させる作業を行っています。

ボランティアの仲間同志が結婚することがよくあります。結婚記念造林も、遊学の森の中で行いました。

新しい林業のあり方を模索

山の中にはカタクリの群生地があります。木に覆われていたときはちらほらでしたが、除伐して光を入れると増殖しまして、3月下旬から4月上旬に一斉に花が咲き、大勢の人たちが見に来ます。菊咲きアズマイチゲ、イチリンソウ、10数種類のスマレ、ツツジなど、春から秋にかけて花が咲き誇り、森林の景観をグレードアップしています。自然の花を眺めて楽しむのも、森林の活用法の一つかなと思っています。

森林は生活の対象でなくなった

林業が生き残る道を模索して、クリの栽培や養豚や盆栽などもやりました。12年前には、草刈り十字軍のメンバーの宿舎として、雪害木を利用し

てログハウスを建てました。ログハウスが珍しいころでしたので、宿泊を希望する人が少なくなかったものですから、草刈り十字軍の宿舎だけではもったいないということで、宿泊施設を造ることにしました。林業体験宿舎というのでフォレストに現在進行形のINGをつけてフォレストイングコテージという造語で命名しました。宿泊だけで年間2300人ぐらい利用して、5、6百万円ぐらいの売上がありますから、副業としてはよい収入になっています。

林業では3町歩、へたをすると4、5町歩伐採しなければ、それだけの売上を確保できません。50年生のスギが山で1本1千円ですから、どうしようもないですよ。東京にも木材市場ありますが、安すぎて材が集まらない状態です。伐採したら再造林できません。森林は生活の対象になっていません。ですから林家は、どうなってもいいといった感じで、半ば自棄自暴気味です。森林組合の作業班に都会の人が参入しているのに、地元の若い人たちはほとんど見向きもしなくなっています。

遊学の道プロジェクトの場合は、学生や社会人のボランティアの人たちが無料で作業をしています。新宿から檜原村へくるのに、電車賃が往復で3千円ぐらいかかります。それにケガと弁当は自分持ちがボランティアの原則ということで活動しています。申しわけない気持ちで一杯ですけれども、それだけ意識が高い人たちです。特に遊学の道プロジェクトの場合は、東京都の教育財団が運営する青年の家の調査員たちがが中心になって、立ち上げたグループなので、行っていることがいけばボランティアのボランティアといった形で、ボランティアが活動しやすいような場づくりに汗を流しています。

森林に親しむ人たち

日本の森林ボランティアの草分け的な“浜仲間

の会”は、結成して17年になりますが、毎月1回第1日曜日に来ています。正月にはウチで新年会を行います。遊学の森プロジェクトは、月1回の活動とは別に、年間2回「水土里（みどり）の森づくり」ということでイベントを行います。保育園の子供たちが親子会できて、竹トンボを造ったりして遊んでいます。竹をナタで割ると、スポンという音がするので、子供たちはうれしがってパンパン割って遊びます。スパッと割るのが気持ちいいみたいです。そんな子供たちをみていますと、幼少のころから自然に親しむようになると思います。炭焼きも行っています。

ある宗教団体は、宗教団体の山を管理するために、毎年、ウチで研修しています。また別の団体では学生のタンレン会ということで120から130人きて、下刈り作業をしました。一生懸命に仕事をしています。

ボランティアの人たちは、森林作業を通じて自分を高めていくようです。草刈り十字軍は、1週間ぐらい作業をして帰るころには、目がらんと輝いてきます。草刈り十字軍は、食事当番は朝3時に起床し、全員4時には出発します。1日働いて疲労していますから、夜の8時にはバタンキューで寝てしまいます。山の作業には、他の仕事と違った価値があるのかなと思っています。

学芸大学のゼミの先生が主催して、小、中学校の先生方が、年1回研修しています。林業体験やアースワークということで、落ちている枝や石あるいは草などを使って創作したり、川の中の昆虫採取の方法などを学んで教育に生かそうとしているようです。学芸大学の学生は、3年前から間伐体験にきています。最初は半信半疑で事務局の方が一緒にきていましたが、事務局の方がはまって、去年も今年も実施しています。しかもそのことで単位が取れることになったということです。

草刈り十字軍は、請負で作業を行っています。

富山県立短期大学の足立原先生が提唱して、除草剤を使わせないことを目的に始めた活動です。当時の森林開発公団が薬剤散布するというので、薬剤散布に要するお金をいただいて、自分たちで下草刈りを実施することにしたものです。ただ単に反対するだけでなく、自ら行動を起こしたグループです。反対するならば、自分は何をするか提案すべきです。その点、草刈り十字軍はすごいなと思いました。ある会合にパネラーとして出席したときに、草刈り十字軍の方と知り合いになりました。ウチの山にもきてもらうことにしました。

森林ボランティアに高い関心

森林クラブも発足して17年になります。群馬県の下仁田や神奈川県の日沢などで、国有林を借りて、そこを拠点にして森林づくりに取り組んでいます。

森林ボランティアには、森林労働的な形態で汗を流すグループ、場所を決めて無料で森林づくりに励むグループ、それに場所を決めないで活動するグループなどがあります。東京都は、青年の家を廃止し、ユースプラザということで多摩地域に一カ所と夢の島にも同様な施設ができる予定です。五日市青年の家の「木と人のネットワーク」の講座は府中青年の家に引き継がれ、今年の夏に3泊4日で山の中にテントを張って森林ボランティア活動を行いました。これは人気講座で、募集すると4、50人すぐに集まりました。川から竹のトイで水を引いてシャワーをつくり、女性たちはキャーキャー言いながらシャワーを浴びていました。トイレも穴を掘って作りました。

東京のボランティアがこのように活発に活動できるのは、青年の家などで講座を終了した人たちが、浜仲間の会、花咲き村、森林クラブ、西多摩自然フォーラムなどの受け皿があるからです。

ボランティアの人たちは、多くは5年で代わっ

ています。新陳代謝を繰り返すためにもいいこと
だと思えます。農林関係で募集する場合と教育関
係で募集する場合では、参加する階層がすこし違
うようです。林業サイドからすれば、会社などい
ろいろなところで募集していただいて、われわれ
がそれを手伝う形で、広がりを持たせられればい
いなと感じています。

東京都では大自然塾ということで、今年から労
働経済局農林部林務課や教育財団、水源林、建設
関係も含めて縦割りではなく、同じようなことを
連結する横並びのネットワークを作って実施しよ
うということで、大自然塾を立ち上げリーダー研
修を始めました。私も2回指導にたずさわりました。

来年からは、リーダーが中心になって3月末ま
でに20回ぐらい現場での体験活動を行う方向で進
めています。

森づくりフォーラムは、最初国土庁主催で、国
技館で「都市と山村の交流フェア」を開催しと
き、当時国土緑化推進機構の巨さんと、ネット
ワークを作って全国規模でやってはどうかという
ことで始めたものです。森づくりフォーラムは、
現在、非常に頑張って活動しています。

ボランティアのボランティア

青年の家で、北見さんという方が担当していま
す。社会教育主事をしておらる、剣道5段の方で
す。現地で活動の輪を盛り上げたり、ち密な計画
を立てて実行する、すばらしい方です。こういう
人がいればボランティア活動家を育成できますの
で、ぜひ見習ってほしいと思っています。

青年の家が、最後の大間伐大会を計画いたしま
した。五日市駅からバスで15分ぐらいかかります
が、その日はあいにくの大雪でバスが通行止めに
なりましたチェーンを巻いたタクシーで駆けつけ
たり、汗びっしょりになって歩いてくる人もいま
して感激しました。それでも100人ほど集まりま

した。

シンポジウムを開いたり、都道にかかっている
木が雪で折れそうになっているのを、揺さぶって
雪を落したりと、計画外の人のことでしたが、皆
面白くてなかなか帰ってきませんでした。そんな
ことで、最後の青年の家の名残を惜しまました。

浜仲間の会は当初、檜原村を中心に活動しよう
ということでしたが、メンバーには設計士、工務
店経営者、写真家の方もいまして、それぞれに思
いがあります。写真家の人たちは「哲人」という
グループを作って、森林の市や日比谷公園で行わ
れる緑の感謝祭などで、パネルを展示して林業の
PRに協力しています。林業家・設計士・工務店
の人たちは「東京の木で家を造る会」を立ち上
げ、1年に10棟ほど建てています。そこから輪が
広がり、近くの木で家を建てようと、国産材を
使った木造住宅を造る活動が全国的に展開される
ようになっています。

阪神淡路大震災のときには、浜仲間の会、創夢
舎、林土戸などといったボランティアのグルー
プが、「山の人から神戸の人へ」ということで、間
伐材を山から引き出して、製材して森林組合のト
ラックで神戸まで運びました。現場に行かない年
配の方は、広報活動を担当するなど、自分を生か
せるところで活動しています。

森林講座修了者に認定書を贈る

森林研修を終了した者には、認定書を贈ってい
ます。そこには「森林業家 田中惣次」ではな
く、「親林業家田中惣次」と書いています。認定
書を造ったきっかけは、横浜の有隣堂がウチで、
1泊2日2万円でカルチャー教室を何年か続けま
した。普通であればお金を払って山仕事をしても
らうのに、逆の発想で実施するというのです。お
金を払ってでも山仕事をするのであれば、それだ
けの価値のあることを受け入れ側でしなくては
いけないわけです。森林づくり講座の修了者に、認

定書を贈りますと皆さん喜んで下さいます。

小中学校では、総合学習の時間で環境講座という
ことで来ています。この前、港区の小学校で私に
会いたいというので行ってきました。総合学習で
森林のことや環境のことを学ぶようになりました。
そういう教育に対応して、林研グループでは、小
中学校の教壇に立つことをあい言葉に、積極的
に取り組みはじめました。森林に対する関心が
盛り上がっている中で、森林の大切さをアピ
ールしようとしています。ありとあらゆる機会を
通じて、森林と林業の大切さを訴えていくことが
必要な時期です。

人間サイド特に日本人的な発想では、花がきれ
いだとか紅葉がうつくしいとか、枝葉の部分だけ
を見てしまう傾向があります。根が枯れれば全部
枯れてしまうこと、根っこの部分を守る人を育て
ることの大切さを話しています。

山を造る人が育てて来た結果、森林資源が増え
ているのですから、それを後につなぐ人たちがい
ないと、環境を守れないことも強調しています。

森林を愛する都民の会を設立

東京都は2000年を最後に植樹祭を中止しまし
た。植樹祭は旧浅川の実験林から出発して、日本
で一番古かったのですが。そこで我々が立ち上
がって「森林を愛する都民の会実行委員会」を立
ち上げて、「森のまつり」を昨年から実施してい
ます。昨年は東京都林業試験場で行いましたが、
今年は多くの人に森林を体験してもらおうと、9
月に奥多摩町で開催しました。森林の手入れの大
切さとスギ、ヒノキの良さ大切さを強調し、植樹
しました。

前日は雨でしたが、当日は晴れて、1500人ほど
参加しました。植林・日原の巨樹・シカの食害の
跡・ワサビ田など、5つのコースに分けて行いま
した。

新しい試みで「フォレストガーディアン」制度

も始まりました。武蔵野市が東京都の農林水産振
興財団の仲介で、青梅市の專業林家である福田さ
んの森林を3畝ほど10年間借りる契約を結んで、
森林組合が作業を行います。市では森林教育や子
供たちの山遊びなどに活用しています。

武蔵野市は、森林の管理費などを財団に支払
い、財団は森林組合の作業班に委託して管理す
ることにしています。山では、森林インストラク
ターが解説します。まだ始まったばかりですが、
うまく回転しているようです。

都道際の立木伐採に補償

檜原村では、都道に面した人工林が成長して暗
くなり、住民から日照権の問題でどうにかなら
ないかとの声が上がったため、立木補償して伐採
することにしています。都道に日陰をつくっている
人工林で、21年生から31年生までは1本3000円ぐ
らいです。年間上限200万円というのもあります。
市場に出しても金にならないですから、全部切り
捨てて、無残に山に放置しておきます。それを見
て、本当に「天にツバ」しているようなものだと
思うことがあります。

経済的な価値だけを見たり、生活環境を考えた
場合いたしかたない部分がありますけれども、こ
ういった問題は今後どこの山村でも起こってくる
のではないかと思います。

相続税で森林が荒れる

相続税を納入するために、伐採した跡に植林で
きない、手入れができないで荒れている山が増え
ています。ここに17年前に書かれた本があります。
その当時と現在は少しも変わっていません。
むしろ悪くなっています。公的な林道は森林所有
者が少ないと入れることは難しく、頭数が多いと
いうことは零細所有者が多いということで、その
ような人たちは林業で生活していないので山に行
きません。結果として林道は使われないのです。

しかし専業や副業で林業を行っている人たちは、ある程度の規模の面積を所有しているということで、頭数が少なくなってしまう、公的な林道の敷設は難しく、歩いて行かざるを得ません。環境を考えるならば、人口数でなく森林面積でとらえる必要があります。面積でとらえることになれば、道が入りやすくなると思います。道がないと山の環境を守れない。

森林環境を守ることが重要であるならば、山林の相続税を改善してほしい。農地と同じように猶予制度をお願いしてきましたが、実現していません。

日本の相続税制はドイツのグラーゼルの方式ということですが、谷洋一先生と日出英輔先生がドイツの相続税制を調査され、その報告会で話を聞きましたところ、ドイツではグラーゼルの方式を知らなかったということです。ドイツは相続税と贈与税が同じで、生前に後継者に財産を渡すほうが自然であるといったとらえかたのようです。

森林が、環境面で重要な役割を果たしていることを考えますと、森林を破壊しないような税制のあり方を考えてもらいたいと思います。

木材は安い住宅資材

木造住宅に要する人手と経費について、近くの腕のいい工務店経営者に聞きますと、入母屋造りですと坪あたり10人ぐらい手間がかかるそうです。切り妻ですと8人から9人、大壁工法は5、6人といった計算があるそうです。木造住宅に占める木材費は、入母屋で大体35%、切り妻で30%、大壁で17~20%程度どだということです。大手のプレカットを使用した建築の場合は、木比率が8%~10%程度といわれています。

一般に、木造住宅は高いというイメージがあるのは、入母屋造りとか化粧柱など高級材を使うことによるものです。市場での値段は、ヒノキの12号角の4本が1本一等材で4千円ぐらいですが、

四面無節ですと4万円以上します。それに2~3割かけますから、大工さんが受け取るのは1本4800円から5000円になります。スギの10.5号角ですと、1本1300円ぐらいです。

秋田県では、秋田スギで家を造る場合、柱以外の部材も秋田スギを使う場合、抽選ですけれども柱を80本無料にしています。

木造住宅を普及させるのであれば、いかに手間ひまをかけないかです。ある建築の先生は、「板倉の家」ということで、4寸(12号)角の柱と1寸の板で家を造るといっています。1寸の板を使っても、木材は安いから人件費が低減されるので安上がりです。スギは米ツガより安いですから。

<質疑応答>

—日照権の関係で、都道に面した人工林の立木補償はどこがするのですか。

答え 檜原村です。おそらく交付金から支出されていると思われます。

—ボランティアや森林講座での参加者は年間どれくらいですか。

答え 2000人くらいです。

—所有山林のすべてを開放しているのですか。

答え 一応開放しています。浜仲間の会は荒れた山で活動していますので、原則としてウチの山には入りません。ボランティアは、一年交代で一つの山を仕上げたら、次の山を私が紹介しています。ボランティアの人たちが直接行っても、所有者の方は応じません。私がきっかけをつくるようにしています。

—多摩川流域で放棄されている森林は60%ですか。

答え 檜原村の本宿地内で、60%が放棄林と放棄林です。それでも檜原村は良い方です。

(文責・吉藤 敬)